

不登校経験と進学後の学校嫌い感情との関連 2¹⁾A Study of the Relationship between Prior School
Non-Attendance and School-Aversion in University Students 2

興津真理子・水野邦夫・吉川栄子・高橋 宗
OKITSU Mariko, MIDZUNO Kunio, YOSHIKAWA Eiko, & TAKAHASHI Shu
(聖泉大学人間学部人間心理学科)

本研究では高等学校までに不登校を経験した者のうち、進学後に現在の学校に対する学校嫌い感情が高い者と、低い者との自己・他者観の比較検討を行なうことを目的とした。大学生と専門学校生148名を対象に調査を実施し、学校嫌い高群（34名：不登校経験が無く、現在学校嫌い得点の高い者）、学校嫌い低群（27名：不登校経験が無く、現在学校嫌い得点の低い者）、不登校経験－学校嫌い高群（11名：不登校経験があり、現在も学校嫌い得点が高い者）、不登校経験－学校嫌い中低群（9名：不登校経験があり、現在も学校嫌い得点の中程度もしくは低い者）の比較を行なった。その結果から、回復過程には次の3段階、すなわち1）自己受容・自尊心の回復、2）自他への信頼感の回復、3）現実の対人関係の回復があると考えられ、不登校経験群のうち、学校嫌い高群は第1段階の途中であり、学校嫌い中低群は第2段階から第3段階にいるのではないかと考えられた。

Key Words：学校嫌い感情，不登校経験，自己・他者観

はじめに

「不登校」という言葉は学校へ行けない、あるいは行かない状態を広く指すものであり、1980年代に入ってからこの言葉を用いる文献や実践者、研究者が増えてきたという（藤岡，2005）。従来は「学校恐怖症（school phobia）」「登校拒否（school refusal）」と呼ばれたものをより包括的に捉えなおした概念が「不登校」であり、呼称の変遷は不登校概念の内容的な拡散

1) 本研究は、日本心理学会第69回大会（平成17年9月10～12日開催、於 慶應義塾大学）において報告を行なった。

を意味していると指摘されている（滝川，2005）。すなわち，かつては学校に行かない（行けない）者のなかに含まれる，怠学（truency）ではない臨床群を「学校恐怖症」，「登校拒否」と呼んでいたのだが，1970年代半ばに長欠率が上昇に転じ，それに伴って臨床像が多様化するにつれて，怠学との間のシャープな線引きも困難になっていったため，「不登校」という呼称が広がったと考えられるのである。

1970年代，なぜ長欠率は上昇に転じたのであろうか。滝川（2005）は，高校進学率が90%を超え，天井を打ち始めたこととの関連性を指摘している。この頃，高校への進学はなんら特別なことではなくなった。誰もが高校に進むようになったことにより，高校進学に向かって励めば豊かな将来が待っているという希望はリアリティを失っていった。こうして進学が積極的な「夢や希望」ではなく，色褪せた半義務に過ぎなくなってきたことが不登校の背景にあると考えられている。

この現象は，今日ではすでに大学に及んでいると見てよいであろう。平成17年度学校基本調査速報（文部科学省，2005）によれば今年度の大学・短期大学進学率（過年度高卒者等を含む）は51.5パーセントで過去最高となり，初めて5割を超えた。また，我が国の大学・短期大学への進学動向に関して，大学・短期大学の収容力は平成19（2007）年には100%に達するものと予測されると文部科学省は発表した。これについて中央教育審議会（2005）は，わが国の高等教育が「エリート」，「マス」段階を経て，量的な「ユニバーサル」段階，すなわち，誰もが自らの選択で高等教育を受けることができる段階に入ったことをあらわしていると述べている。こうした世の中の動きに呼応するように近年では大学生の不登校も問題にされつつあり（牧野，2001），また，ひきこもりやニートとの関連で不登校が取り上げられることも少なくない。不登校概念はますます多様化してきているといえよう。

ところで，不登校という経験は，当事者にとってどのような意味を持つのであろうか。森田（2003）は，平成5年度に「学校ぎらい」を理由に年間30日以上欠席し中学校を卒業した生徒を対象として，不登校当時の状況，当時

の心境、不登校時の援助体制、その後の進路状況等について追跡調査を行った。その中で不登校であったことがマイナスに影響したかどうかについて尋ねたところ、「マイナス」24%、「マイナスではない」39%、「どちらでもない」35%という結果が得られた。不登校で失ったものとしては、「人間関係(友人・信頼など)」、「学校生活(学力、思い出など)」が挙げられる一方、得たものとしては「精神的な強さ」、「人間関係」、「ゆっくり考える時間」などが挙げられた。この結果から、不登校経験は心理的危機である一方で、自己を問い直すきっかけとして、自他に対するポジティブな見方を育むというポジティブな側面も持つのではないかと考えられる。

興津・水野・上西・吉川・高橋(2003)は、高等学校卒業までに不登校を経験した者が、進学後、現在の学校をどのように捉え、自己や他者をどのように捉えているのかを、学校嫌い感情との関連から検討した。その結果、不登校経験群は学校嫌い感情得点は学校嫌い高群と同等に高いが、不登校経験者のみに注目すると、高い自尊感情や自己信頼感といった自己に対するポジティブな見方を持っている者ほど学校嫌い感情が低いことが明らかになった。

この結果は、不登校経験者の中にポジティブな自己観を持ち、適応している者とそうでないものがあることを示唆していると考えられた。この2群の差異について、興津他(2003)では不登校経験者が9名と少なかったため詳細を検討することができなかったが、その後さらなるデータ収集により、不登校経験群のデータが追加された。そこで、本研究では不登校経験があるが進学後は学校嫌い感情がそれほど高くない者と、不登校経験があり進学後も学校嫌い感情が高いままの者との自己・他者観に関する比較検討を行ない、これらの違いが何によって生じるのかを検討することを目的とした。

方 法

被調査者 被調査者 大学1年生及び看護系専門学校1年生148名(男子75名、女子73名)。

質問紙 調査に用いた質問紙は、以下の尺度によって構成された。

1. 学校嫌い感情測定尺度（古市，1991）：一般の児童・生徒が抱く学校に対する忌避的な感情を「学校嫌い感情」とし，その度合いを12の質問項目で測定するものである。12項目のうち，「今のクラスはよくないので，ほかのクラスに変わりたい」は大学生への質問項目としては実情に合わないので削除し，11項目を用いた。
2. 自尊感情尺度（山本・松井・山成，1982）：自身を「これでよい」と感じる程度を測定する10項目の質問紙であり，自尊感情が低いということは，自己拒否，自己不満足，自己軽蔑を表し，自己に対する尊敬を欠いていることを意味する。
3. 自己受容尺度：田中（2002）による居場所機能尺度をもとに作成した5項目を用いた。
4. 信頼感尺度（天貝，1995）：对人的信頼感を多次元的に測定する尺度であり，「自分への信頼（6項目）」「他人への信頼（8項目）」「不信（10項目）」の3下位尺度から成る。
5. 改訂版UCLA孤独感尺度（工藤・西川，1983）：対人関係全般における孤独感を測定する尺度で20項目から成る。
6. 異なった関係における孤独感尺度（広沢・田中，1984）：孤独感を関係性の次元，相互作用性の次元から測定する質問紙であり，本研究では，友人関係孤独感に関する10項目を用いた。
7. エゴグラムAC尺度（杉田，1990）：交流分析理論に基づいて，5つの自我状態を測定する尺度である。5つの自我状態とは，(1)批判的な親の自我状態であるCritical Parent（以下CP），(2)養育的な親の自我状態であるNurturing Parent（以下NP），(3)合理的な判断をする成人の自我状態であるAdult（以下A），(4)自由な子どもの自我状態であるFree Child（以下FC），(5)従順で抑制的な子どもの自我状態であるAdapted Child（以下AC）である。このうち本研究ではAC尺度（10項目）を用いた。
8. フェイス・シート
過去の不登校経験有無，期間，きっかけをたずねる質問を含めた。

表1 不登校経験と学校嫌い感情による被験者のグルーピング

	不登校経験			
	無		有	
学校嫌い高	34人	26.6%	11人	55.0%
学校嫌い中	67人	52.3%	6人	30.0%
学校嫌い低	27人	21.1%	3人	15.0%
計	128人	100.0%	20人	100.0%

なお、1～7の各尺度への回答は、すべて5段階で評定できるようにした。
 手続き 被調査者に上記質問紙を配付し、大学生には回答のうえ後日提出するように、専門学校生には授業時間の一部を利用してその場で回答するように、それぞれ求めた。

各群のグルーピング 学校嫌い感情得点の上位25パーセントを学校嫌い高群、下位25パーセントを低群、その間に含まれる者を中群とした。不登校経験の有無と学校嫌い感情の高さとの関連は表1のとおりであった。そこで、本研究では以下の4群を比較検討した。学校嫌い高群（34名：不登校経験が無く、現在学校嫌い得点の高い者）、学校嫌い低群（27名：不登校経験が無く、現在学校嫌い得点の低い者）、不登校経験－学校嫌い高群（11名：不登校経験があり、現在も学校嫌い得点が高い者）、不登校経験－学校嫌い中低群（9名：不登校経験があり、現在も学校嫌い得点の中程度もしくは低い者）。

結 果

ポジティブな自己・他者観について

ポジティブな自己・他者観に関する4尺度の平均得点を図1に示した。

各群を被験者間要因とする分散分析を行ったところ、4尺度全てにおいて有意差が見出された ($F_s(3,77) = 3.75 \sim 6.78, p < .05$)。Tukey法による多重比較を行ったところ、いずれの尺度においても学校嫌い高群と低群との間には有意差が見られたが、不登校経験有の2群間には差がなかった。しかし、「自分への信頼」、「他人への信頼」を見ると、学校嫌い低群の得点との間に、不

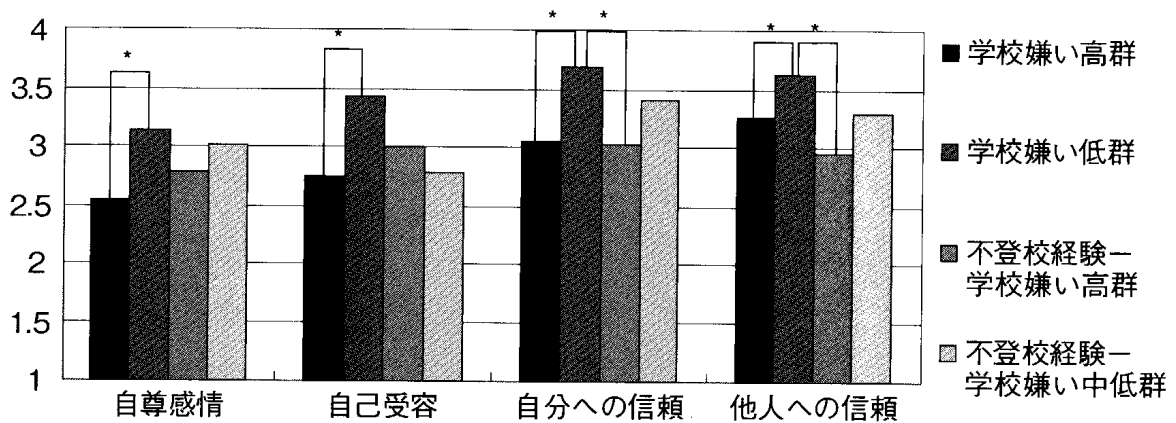


図1 各群における自己・他者観諸尺度（ポジティブ）の平均得点

登校経験-学校嫌い高群は有意差があったが、不登校経験-学校嫌い中低群との間には有意差が見られなかった。すなわち、不登校経験-学校嫌い高群は、自他への信頼感が学校嫌い高群と同程度に低かったが、一方で不登校経験-学校嫌い中低群では、自他への信頼感が学校嫌い低群と学校嫌い感情の高い2群との中間となっていた。したがって、自他への信頼感に関しては、不登校経験を持つ2群のうち、学校嫌い中低群の方が高群よりも若干よい状態にあることを示していると考えられよう。

また、ポジティブな自己・他者観のうち、「自尊感情」、「自己受容」に関しては、学校嫌い高群と低群との間にのみ有意差が見出されたので、不登校経験のある2群はいずれも両群の中間的な値であったといえる。

ネガティブな自己・他者観について

ネガティブな自己・他者観に関する4尺度の平均得点を図2に示した。

各群を被験者間要因とする分散分析を行ったところ、4尺度全てにおいて有意差が見出された ($F_s(3,77) = 3.22 \sim 6.54, p < .05$)。Tukey法による多重比較を行ったところ、友人関係孤独感、エゴグラムAC尺度に関しては、学校嫌い低群が他の3群に比べて有意に低い得点を示した。不登校経験のある2群と学校嫌い高群は友人関係において孤独感を感じており、また、他者に対して従順で抑制的であることが示唆された。他者不信に関しては不登校経

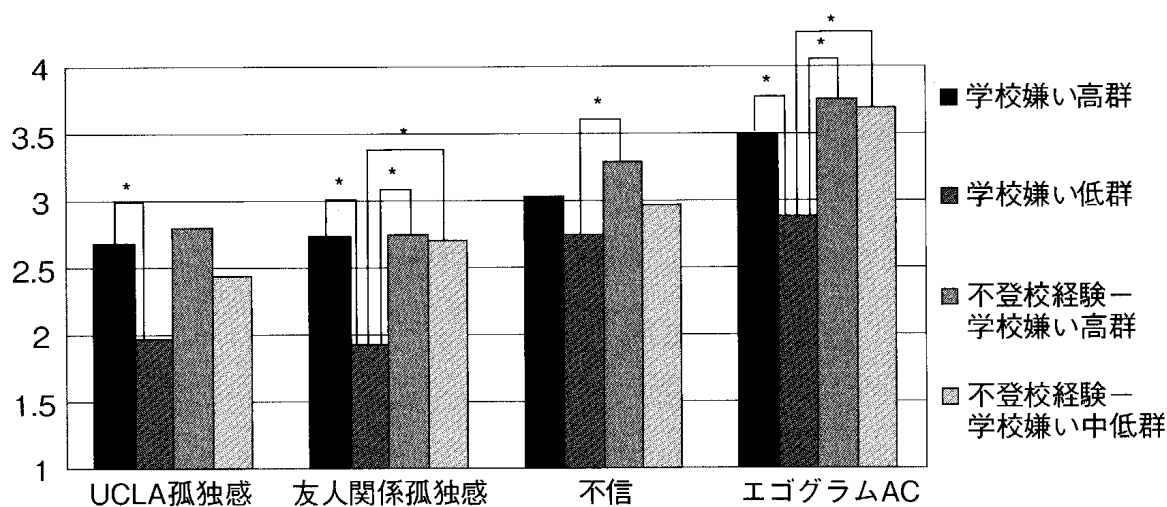


図2 各群における自己・他者観諸尺度（ネガティブ）の平均得点

験-学校嫌い高群と学校嫌い低群との間にのみ有意差が見られた。

不登校のきっかけについて

学校嫌い高群と中低群によって挙げられた不登校のきっかけを表2に示した。いずれの群も人数が少ないため、明瞭な傾向を読み取るのは難しいものの、高群は全ての項目にわたって選択した者がおり、項目12「とくに思いあたることはない」を選択した者がいなかったのに対して、中低群では誰からも選択されなかった項目があり（項目5, 8, 10）、さらに項目12を選択した者もいた。中でも項目5（学校のきまりへの不満）、項目8（親との対立）といった項目は高群の方が選択していた。

表2 学校嫌い得点の高・低各群における不登校のきっかけ（複数回答）

不登校のきっかけ	中低群	高群	全体
1 友人関係をめぐる問題（いじめ，けんか等）	3 33.3%	4 36.4%	7 35%
2 教師との関係をめぐる問題 （教師が怒る，注意がうるさい，体	2 22.2%	4 36.4%	6 30%
3 学業の不振（授業がわからなくなった，成績がよくない， 試験がきらい等）	1 11.1%	3 27.3%	4 20%
4 クラブ活動，部活動の問題（先輩からいじめられた，他の 部員との関係が悪くなった等）	2 22.2%	1 9.1%	3 15%
5 学校のきまり等をめぐる問題 （学校の校則がうるさかった等）	0 0.0%	3 27.3%	3 15%
6 入学，転校，進級してなじめなかった （転校，進級したとき不適應等）	1 11.1%	2 18.2%	3 15%
7 家庭生活環境の急激な変化 （父親や母親の単身赴任等）	1 11.1%	1 9.1%	2 10%
8 親子関係をめぐる問題 （親が怒る，親の言葉や態度への反発	0 0.0%	4 36.4%	4 20%
9 家庭内の不和 （両親の不和，祖父母と父母の不和等）	2 22.2%	3 27.3%	5 25%
10 病気をしてから	0 0.0%	1 9.1%	1 5%
11 その他	4 44.4%	3 27.3%	7 35%
12 とくに思いあたることはない	2 22.2%	0 0.0%	2 10%

考 察

本研究では不登校経験のある者のうち，不登校経験があるが進学後は学校嫌い感情がそれほど高くない者と，不登校経験があり進学後も学校嫌い感情が高いままの者との間にどのような違いがあるのかを検討してきた。ポジティブな自己・他者観，ネガティブな自己・他者観に関して，不登校経験はなく学校嫌い感情が高い群，低い群とあわせて4群の比較を行なったところ，不登校経験がある2群間に有意差は見出されなかった。しかし，不登校経験のない2群も含めた相対的な差異から，不登校経験のある2群の特徴は次のように記述しうると考えられる。まず，不登校経験－学校嫌い高群は，自分に価値を認めることができ，自分を受け入れることもある程度できているが，「自分は信頼できる」という確信は持てない。また，他人に対しては，「裏切られるかもしれない」という不信感があり信頼できない。こうしたことから

対人関係全般においても、友人関係においても孤独感をもっているが、あまり主張せず従順に周囲に合わせることで過ごしてきている。一方、不登校経験－学校嫌い中低群は、自分の価値を認めることができ、自他に対する信頼感も高いとはいえないがある程度持つことができている。友人関係においては孤独感を感じているが、対人関係全般での孤独感が高群ほど顕著ではない。ただし、他者との関係において、あまり主張せず従順に周囲に合わせるやり方を取りがちであることは高群と同様である。

2群の大きな違いは、自他に対する信頼感であろう。この差異は不登校になったきっかけによるものである可能性もあり、また回復過程のどこに位置するかの違いであるという考え方もできる。

不登校になったきっかけの相違による違いであるという考え方とは、不登校経験－学校嫌い高群は不登校になったきっかけ、もしくは不登校中の経験により、自分もしくは他人が信じられないという信念を得てきたことが継続して、現在も持続しているという考え方である。いじめなどが原因で不登校になった場合があてはまると思われる。一方、不登校経験－学校嫌い中低群はこうした他者不信に関わる出来事以外のきっかけで不登校になったため、自他への信頼が損なわれていないと考えられる。

これに関して、不登校のきっかけについて2群の相違を検討したところ、親や学校のルールによる締め付けに対する反発を反映するような項目が学校嫌い高群においてやや多く選択された以外には顕著な傾向は見いだされなかった。また、いじめなどを含む項目を不登校のきっかけとして選択した者はいずれの群にも同程度含まれており、この点でも明確な傾向の違いは見いだされなかった。したがって、本調査においては、2群の違いがきっかけの相違であるという明らかな証左は得られなかった。

一方、回復過程のどこに位置するかによる違いであるという考え方では、2群の差異は回復過程のどこに位置するかの違いであると考えられる。2群の自己・他者観を検討すると、いずれの群も自尊感情や自己受容は学校嫌い高群と低群の中間的値を示しているという点で共通しており、この点に関しては

両群ともある程度課題を達成しつつあると考えうる。また、不登校経験のある2群は友人関係においては孤独感を感じており、他者との関係において、あまり主張せず従順に周囲に合わせるやり方をとりがちである点も共通しており、今後の共通の課題であると考えられる。両者の相違点は自他への信頼感であり、不登校経験-学校嫌い中低群ではある程度達成されてきているが、不登校経験-学校嫌い高群にとっては今後の課題となっていると考えられる。これらのことから、回復過程に次の3段階、すなわち1) 自己受容・自尊心の回復、2) 自他への信頼感の回復、3) 現実の対人関係の回復があると考えられ、この順で回復過程が進むと考えた場合、不登校経験群のうち、学校嫌い高群は第一段階の途中であり、学校嫌い中低群は第二段階から第三段階にいとと考えられる。

今後の調査においては、これら他者に対する信念がどのように形成されてきたのかについて、実際の出来事と内面においてどのようにその出来事が評価されてきたのかを併せて検討する必要がある。また、本研究では不登校経験-学校嫌い中低群が学校嫌い感情が低い者と中程度の者の両方を含んでいるため、明確な結論を導きにくいところがある。今後、さらに不登校経験者からのデータを蓄積し、上述の対人関係面に関して詳細な検討をすることが必要であると考えられる。

引用文献

天貝由美子 1995 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響 教育心理学研究, 43, 364-371.

中央教育審議会 2005 我が国の高等教育の将来像 (答申)

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm (情報取得日2005年10月27日)

藤岡孝志 2005 不登校臨床の心理学 誠信書房

古市裕一 1991 小中学生の学校ざらい感情とその規定因 カウンセリング研究, 24, 123-127.

- 広沢俊宗・田中國夫 1984 異なった関係における孤独感尺度の構成 関西学院大学社会学部紀要, **49**, 179-188.
- 稲村 博 1988 登校拒否の克服 新曜社
- 工藤 力・西川正之 1983 孤独感に関する研究(1) 孤独感尺度の信頼性・妥当性 実験心理学研究, **22**, 99-108.
- 牧野幸志 2001 大学生の不登校に関する基礎的研究(1):大
学生の不登校と退学希望の理由の探索 高松大学紀要, **36**, 79-91.
- 森田洋司 2003 不登校-その後 不登校経験者が語る心理と行動の軌跡
教育開発研究所.
- 文部科学省 2005 平成17年度学校基本調査速報
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/04073001/index.htm (情
報取得日2005年10月27日)
- 興津真理子・水野邦夫・上西恵史・吉川栄子・高橋 宗 2003 不登校経験
と進学後の学校嫌い感情との関連 聖泉論叢, **11**, 27-37.
- 杉田峰康 1990 医師・ナースのための臨床交流分析入門 医歯薬出版株式
会社
- 滝川一廣 2005 不登校理解の基礎 臨床心理学, **5**(1), 15-21.
- 田中順子 2002 思春期・青年期の「居場所」の心理構造 具体的場面・「居
場所」感情・「居場所」機能の観点からの検討
<http://pweb.sophia.ac.jp/~y-aketa/thesis/2002/mt02-04.pdf>
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造
教育心理学研究, **30**, 64-68.